

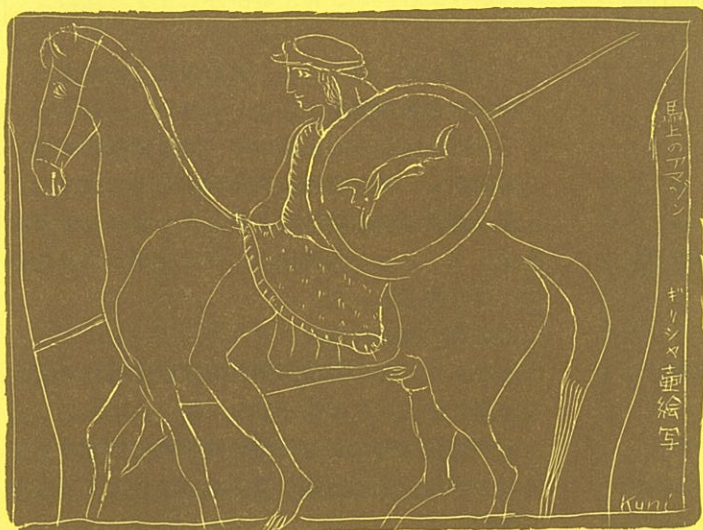
# 図書館だより

1997. 11. 1

第19巻3号

通巻143号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library



## 京のアカンサス

画と文・國田祐作

京都の南禅寺山門といえば、天下の大泥棒石川五右衛門が楼上から京のまちを見下ろし「絶景かな、絶景かな」と大見得を切ったことで有名である。もちろん芝居での話である。

この山門を抜けて境内を右に曲がると赤レンガの連続アーチが見えてくる。これが水道橋。明治の中頃、琵琶湖から京都に水を引く工事がはじまり、その水道架橋が境内を横切っているのだ。アーチ橋の上部に水路があり、百年たったいまでも勢いよく水が流れている。緑濃い裏山と赤レンガのアーチ橋はふしぎに調和している。

アーチ構造の水道橋の本案は古代ローマである。百万以上の人口を抱えるローマの都に、遠い水源から野を越え谷を越えて長い水道橋をつくらせて水を引いた。その遺跡はローマ近郊に残っているが、京都には現役の水道橋がある。

小雨の昼さがり、京のまちを歩いていて偶然、静かな住宅街の一角にギリシャローマ美術館を見つけた。古代ギリシャ、ローマの出土品、大理石の彫像や壺などを40年にわたって収集してきた個人コレクターが自宅を美術館に改造し、その収

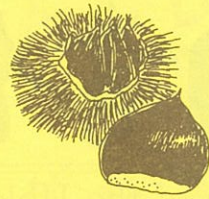
集品を一般に公開している。この四月に開館したばかりというからあまり知られていないらしく、訪れる人も少いようだ。

もともと住宅の改造だから館内はそれほど広くはないが、持ち主の手塩にかけた収集品への愛情が伝わるような、つつましい雰囲気がある。なにより巨大な美術館にありがちな威圧感がないのありがたい。ひとつひとつの陳列品とゆっくりと話し合えるような心やすさがある。精妙な壺絵の線描に見とれ、愛すべき婦人像をデッサンしながら、私は午後の半日、この美術館をひとり占めしたのである。休憩室でもてなしのクレタ産の白ワインをひとり味わっていると、雨あがりの空から微風が渡ってきた。エーゲ海の青さとアーモンドの白い花ざかりが目の前に浮んでくる。

帰りみちの庭先きにアカンサスの茂みを見つけた。地中海沿岸原産の、切れこみの深い葉をもつこの草はギリシャ・ローマの柱頭デザインの源泉であった。この夏にはうす桃色の花をつけたという。京の庭にはアカンサスもよく似合うのである。

(くにた・ゆうさく 教養部教授 芸術論)

# 書秋、一麦想



'97 夏忘れの記

雲が流れる。速く。  
風が流れる。冷たく。  
空はもう秋の色である。  
体温はもう冬を感じている。

この夏の評判は、  
NHK 朝の連続テレビ小説「あぐり」。  
戦乱の中にも、女手一人でたくましく子供たち  
を育てた女性の姿はひと夏の清涼剤ではな  
かったか。

その人こそ  
吉行淳之介の母。  
作家、モダニストのエイスケの妻。  
原作者、吉行あぐりさんの『梅桃ゆすらうめの実るころ』  
は図書館にも入っているはずだ。

この夏のもう一つの評判は、  
『少年H』。  
神戸で戦時の少年時代を送った妹尾河童氏の  
作。

外国人に囲まれた生活から来る、様々な迫害。  
少年はそれを明るく、おおらかにほじき飛ばして  
いった。

そこにあるのは、人間への信頼だった。  
この本も又、図書館に入っているはずだ。

この夏も又、騒々しく、あわただしかった。  
相次ぐ台風の襲来。  
そして、時ならぬ、あのアメリカ艦隊の寄港。  
あたかも、次なる戦争を企図するかのような。  
そう言えば、去年のアトランタ、オリンピック  
直後、クリントン大統領のイラク空爆があったの  
はやはり夏であった。

未曾有の株高に沸くアメリカ。  
まさしく、その経済の流れを反映するかのよう  
な軍事のデモンストレーション。

その繁栄はあたかも戦時経済下かと錯覚すらす  
る日本の超低金利政策に支えられていることは明  
らかだ。

日本の行革も又、この夏の話題となった。  
そこで示された素案はなんと、あの堺屋太一氏が  
朝日新聞で連載中の『平成三十年』と寸分違わな  
いのはどういうことなのか。

行革会議が堺屋氏のストーリーをまねたとしか  
言いようがない。

ダイアナ元妃の突然の事故死も又、この夏の話  
題となった。その突然さがミステリーじみてもい  
る。

## 10年間の主な指標（'87年～'96年）① くいずれも本館分

	10年間	1年平均
△貸出総冊数	24万冊	2.4万冊
うち学生	145,868冊	1.45万冊
△貸出人数	10.4万人	1万人
うち学生	88,252人	0.9万人
△貸出証処理数	90万枚	9万枚

今、求められる

# ライブラリー・ガバナンス

この秋、  
図書館は静寂だ。  
閑静と言ってもいい。  
とは云っても、利用は上昇しつづけている。

この秋、  
図書館の入館者が250万人を達成。  
これは、新館オープン以来10年と6カ月。  
1年間で約25万人が入館したから、8,000人の  
在籍で、学生1人当たり4回は図書館を訪れたこと  
になる。

この10年で、  
総利用冊数（貸出+開架閲覧、いずれも本館の  
み）は約100万冊。（学生のみ）  
1年間ではざっと10万冊の図書が利用された。  
学生1人当たりでは年平均13冊強。

本の受け入れ冊数も増加しつづけていることは  
前号の統計でも明らかだ。

それらは大いに結構という訳だが、もはや収納  
する空間が手狭になり、所によってはあふれ出て  
いる。

人は「その器に合わせて酒を盛る」という。

一体、図書館はどこまで発展しつづけるのか？  
それに見合った労働力や収容能力は限度を越え  
ようとしている。

予算は果たして、このままのような上昇カーブ  
で進むのか？

この夏、  
一つの用語が登場した。  
コーポレート・ガバナンス  
Corporate Governance  
訳して「企業統治」。

おそらくは、アメリカの大財閥、モルガン家や  
ロックフェラー家、デュポン家やメロン家、  
と言った大富豪家たちの持株会社の意を受けた  
利益のあくなき追求のための「経営用語」ではあ  
るのだろうが、その意味するところは、情報公開  
や適性な投資への意志決定。地域や環境への配慮  
といった「企業倫理」を総括する言葉のようだ。

もし、図書館に今求められているとすれば、こ  
の「コーポレート・ガバナンス」の方向性だろ  
う。名づければ「ライブラリー・ガバナンス」。  
利用者を真っ正面に据えたライブラリー組織の  
布陣。それは「開られた系」の創造だ。

これをバスケットボールやサッカーにたとえる  
なら、「ゾーンディフェンス」から「マンツーマンデ  
フェンス」へのシフトということになる。

この柔なる対応が館内のセクショナリズムを越  
えて求められるのである。

今や日本は、危急存亡の時である。

国の借金は260兆円。道庁のそれは3兆円、札幌  
市のそれでも7,000億円。（いずれも年度予算と同額）。

図書館も又、このような状況の枠外にありつづ  
けられるとは思えない。証券スキャンダルしかり、  
拓銀しかり。かくて、'97年の夏は過ぎ去りぬ。

## 10年間の主な指標（'87年～'96年）② <いずれも本館分>

	10年間	1年平均
△書架組み入れ冊数	27万冊	2.7万冊
うち雑誌(図書換算)	3万冊	0.3万冊
△配本総数	130万冊	13万冊
うち開架	94万冊	9.4万冊
△入館者数	240万人	2.4万人

# 英国政治経済学図書館

小宮文人

私が今までに利用した図書館は沢山あるが、特に思い出の多い図書館は、イギリスの英国政治経済学図書館 (British Library of Political & Economic Science) 及びアメリカのカリフォルニア・パークリー・ロー・スクール図書館である。いずれも、私の論文作成のときお世話になった図書館である。とりわけ、英国政治経済学図書館(以下、政経図書館)は、私の海外での研究生活を、もっとも長い間、支えてくれた。私が初めてこの図書館を訪れたのは昭和54年のことであった。当時、私は、ロンドン大学のカレッジの一つであるロンドン政経学院 (London School of Economics and Political Science=一般にイギリス及び欧米では“LSE”と呼ばれている)の研究生をしていた。このときは、政経図書館の5階にあったサントリー・トヨタ国際経済関連センターのあるプロジェクトのメンバーに潜り込み、一室を我が物顔で自分の調査研究のために利用することができた。因みに、当時このセンターの長をされていた国際的に著名な経済学者、森嶋通夫先生(現在はLSE名誉教授)には、大変お世話になったものである。その後、昭和62年から63年に掛けての10カ月間及び平成元年の3カ月間、LSE大学院の博士課程の院生として、論文作成のために利用することになった。このときは、いわゆる正規の大学院生ということで、図書館のキャレルを割り当てられたが、以前にいた5階の部屋のように自由に電話など使える特権もなく、国際経済関連センターが行った無料のティータイムやパーティーなんか望むべきもなく、毎日、読書とコピーに明け暮れる生活を送った。

さて、政経図書館はLSEのいわゆる付属図書館である。この図書館となっているライオネル・ロビンス・ビルディングは、ロンドンの法曹街にあり、隣の建物がイギリスの最高法院である。そ

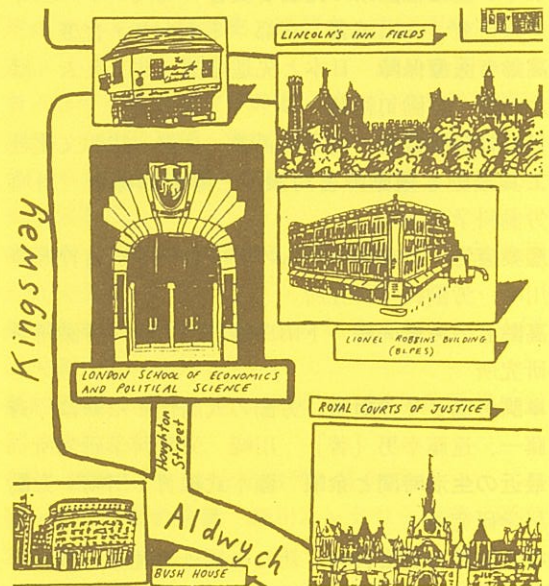
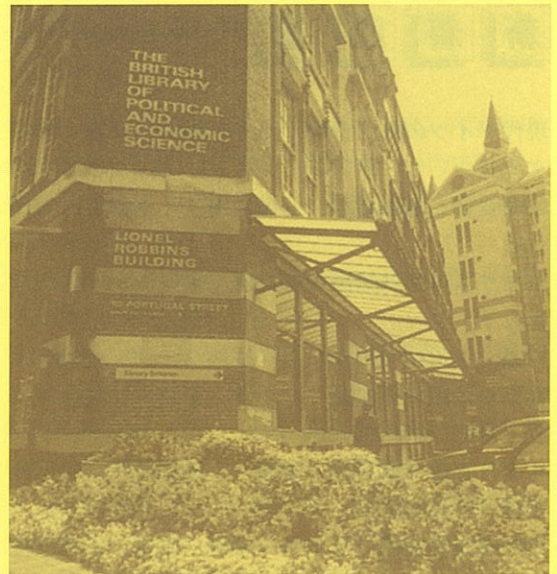
の蔵書数は雑誌等を含めると400万アイテム(定期刊行雑誌が継続購入中のもの13,000種類、購入停止ないし出版停止分まで入れると28,000種類あるといわれる)を上回るが、これはLSEの学生総数(現在、約5,000名。大学生と大学院生、イギリス人と外国人がそれぞれほぼ50%ずつ)に比し、バランスを逸するほど大きな数であるといえる。それもそのはずで、政経図書館は社会科学系列の書籍や資料を集めた単一図書館としては世界最大規模であり、国内及び海外からの学生や研究者など一日当たり約4,000名が利用しているといわれている。私がLSEに在籍中に聞いた話では、社会科学系の書籍がすべてひとつの図書館にまとまってあることから、ケンブリッジ大学の学生なども、わざわざこの図書館を利用するためにロンドンまで出てくる例があるとのことであった。それでも、私が専攻した法律学についていうと、判例集等が他の学生に使われていることがときどきあった。しかし、そのような場合には、徒歩で行ける距離にあるロンドン大学の本部図書館、または上級法律学研究所の図書館等で事足りた。若干つけ加えれば、LSE自体、イギリス国内はもとより海外でも極めて高い評価を受けている。LSEは、その名称から想像するものとは異なり、経済学部、法学部、労使関係学部、国際関係学部、統計学部、政治学部、考古学部等の計16の学部からなる社会科学系の総合カレッジ(我が国の大学に該当する)であり、理工科学系のインペリアル・カレッジと共にロンドン大学(カレッジと研究機関の連合体)の双壁とされ、ヨーロッパの名門カレッジ(大学)の一つである。イギリス国内の調査によれば、その教員の研究レベルは、オックスフォード、ケンブリッジに並ぶものと評価され、その卒業生で現在イギリスの国会議員を務める者が1997年現在で61名いる。これは、オックス

フォードやケンブリッジの如何なるカレッジの出身者よりも多いといわれる。また、極めて国際色豊かなカレッジで、現在及び過去に世界の国々の元首や首相を務めた者が23名もおり、さらにいえば、現在、閣僚や大使を務める者が120名、銀行の頭取を務める者が41名いる。特に経済学部の学生及び教員からは今までに5名のノーベル賞学者を輩出している。以上の実績は、オックスフォード及びケンブリッジ全体の学生数と比べ、LSEの学生数が少ないことや、その歴史がたかだか100余年でしかないことを考慮すると驚くべきことである。

さて、政経図書館は、地上5階、地下2階からなり、古書、パンフレット、学位論文等を所蔵する一部を除いては全て開架方式をとっており、館内をツアーするだけでも結構疲れた記憶がある。利用者の読書スペースは、院生・研究者のキャレルを含め1,000名収容できるようになっており、情報サービス用コンピュータの端末機は350以上備え付けられている。また、1980年以降の図書カタログはコンピュータ化されている。図書案内、貸し出しカウンター、コピーセンター等は1階(グランドフロア)にある。コピー機は各階にもあり、全部で14、5機あった記憶がある。どのような本や資料でもそれが社会科学系の英文のものであれば、ほとんど館内で入手できたといってよい。とりわけ、政府及び国際機関の刊行物の所蔵は完璧に近く、また同図書館のようにアメリカ合衆国政府の刊行物をもれなく揃えている例は、合衆国外では三つしかないといわれる。政経図書館の創設は1895年のLSEの開校までさかのぼることができるようであるが、建物は何度か移り(第二次大戦中はLSEとともにケンブリッジ大学のキャンパスに疎開していた)、ロックフェラー財団の援助を得て拡大してきたものである。

筆者は、今まで、自分の書いたLSE発行の簡易出版物及びLSEに提出した博士論文をこの図書館に所蔵してもらっているが、近い将来、本格的な著書を英語圏で出版し、所蔵してもらうことを夢としている。

(こみやふみと 法学部教授 労働法)



## 新 着 図 書

- 現代ドイツの社会保障 足立正樹著 京都 法律文化社
- 住民自治と地域福祉 三塚武男著 京都 法律文化社
- イギリス社会政策論の新潮流 福祉国家の危機を超えて ジョーン・クラーク、ディビッド・ボスウェル編 大山博 [ほか] 訳 京都 法律文化社
- 都市と貧困の社会史 江戸から東京へ 北原糸子著 東京 吉川弘文館
- イタリアの労働環境と健康 上畑鉄乃丞 松田博編著 労働経済社
- 社会福祉と貧困 江口英一編著 京都 法律文化社
- ドイツ型福祉国家の発展と変容 現代ドイツ地方財政研究 山田誠著 京都 ミネルヴァ書房
- 高齢者医療保障 日本と先進諸国 井上英夫 [ほか] 編 労働旬報社
- 日本社会福祉史 池田敬正著 京都 法律文化社
- 工具振動と振動障害対策 三浦豊彦編著 川崎労働科学研究所
- 産業疲労 自覚症状からのアプローチ 吉竹博著 川崎 労働科学研究所
- 高齢者の労働問題 下山房雄著 川崎 労働科学研究所
- 単調労働とその対策 労働の人間化のために 斉藤一、遠藤幸男 [著] 川崎 労働科学研究所
- 最近の生活時間と余暇 藤本武編著 川崎 労働科学研究所
- 社会政策と社会行政 新たな福祉の理論の展開をめざして 大山博、武川正吾編 京都 法律文化社
- 日本社会調査の水脈 そのパイオニアたちを求めて 江口英一編 京都 法律文化社
- 戦後社会福祉の展開と大都市最底辺 岩田正美著 京都 ミネルヴァ書房
- 人材開発論 人材開発活動の実践的・体系的研究 梶原豊著 東京 白桃書房
- 金融・証券市場 情報化と審査能力 日向野幹也著 新世社
- 過労死への挑戦 臨床医から企業戦士へのメッセージ 田尻俊一郎 [ほか] 著 労働経済社
- 春日政治著作集 第1～8冊 春日和男編集・解説 勉誠社
- 第1冊 仮名発達史の研究
- 第2冊 国語文体発展史序説
- 第3冊 国語叢考
- 第4冊 国語叢考続
- 第5冊 万葉片々
- 第6冊 古訓点の研究
- 第7冊 国文法教育
- 第8冊 青鸞集
- 南蛮屏風考 岡本良知著 東京 昭森社
- 吉利支丹洋画史序説 岡本良知著 昭森社
- キリシタンの美術 千沢楨治、西村貞、内山善一編 東京 宝文館
- 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>3 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
- 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>6 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
- 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>8 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
- 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>10 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
- 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>18 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
- 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>19、20 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
- 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>24 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
- 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>27 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
- 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>40 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
- 明治翻訳文学全集<新聞雑誌編>46 川戸道昭 榊原貴教編 大空社
- 守覚法親王の儀礼世界 仁和寺蔵紺表紙小双紙の研究 基幹法会解題・付録資料集・論考・索引編 仁和寺紺表紙小双紙研究会編 勉誠社
- 守覚法親王の儀礼世界 仁和寺蔵紺表紙小双紙の研究 本文編 2 仁和寺紺表紙小双紙研究会編 勉誠社

- 地域史を学ぶということ 佐々木潤之介著 吉川弘文館
- 蓄熱工学1 (基礎編) 関信弘編 森北出版
- 蓄熱工学2 (応用編) 関信弘編 森北出版
- 建築と非建築のはざままで ロバート・ハービソン著 浜田邦裕訳 鹿島出版会
- スウェーデンの住環境計画 スヴェン・ティーベイ編著 外山義訳 鹿島出版会
- 都市と建築の解剖学 形態分析によって「設計戦略を読む」 ジェフリー・H. ベイカー著 富岡義人訳 鹿島出版会
- 都市と建築のパブリックスペース ヘルツベルハーの建築講義録 ヘルマン・ヘルツベルハー著 森島清太訳 鹿島出版会
- 建築 オーム社
- モーツァルトのザルツブルク 新私のモーツァルト・クロニクル 海老沢敏著 音楽之友社
- 嫌われる理工学の楽しさ 西沢潤一[ほか]著 プレジデント社
- 「ほんとうの私探し」の技術 セミナール“自分史”入門 野村正樹著 早稲田教育出版
- モラル・サイエンスの形成 ヒューム哲学の基本構造 神野慧一郎著 名古屋 名古屋大学出版会
- ボランティアという生き方 ロバート・コールズ著 池田比佐子訳 朝日新聞社
- 北海道の歴史60話 木村尚俊[ほか]編著 三省堂
- ニュー・ヒストリーの現在 歴史叙述の新しい展望 ピーター・バーク編 谷川稔他訳 京都 人文書院
- 高齢者・障害者に配慮の建築設計マニュアル 「福祉のまちづくり」実現に向けて 高橋儀平著 彰国社
- 「建築」批判 空間をめぐる光芒 鈴木隆之著 彰国社
- 建物の汚れの原因と対策シート 井上容実著 彰国社
- 根源からの出発 阿部正雄著 京都 法蔵館
- 空間デザインと構造フォルム Heino Engel 著 日本建築構造技術者協会訳 技報堂出版
- 日本の自然 4.5 貝塚爽平[ほか]編 岩波書店
- 世界美術大全集 西洋編 第24巻 小学館
- 筆まめ Ver.6 for Windows 活用ハンドブック 河野春夫著 ナツメ社
- Word 6.0 for Windows 活用ハンドブック 丸舟FSL 著 ナツメ社
- 絵は語る 9 松島図屏風 俵屋宗達筆 太田昌子著 平凡社
- 新古今集新論 二十一世紀に生きる詩歌 塚本邦雄著 岩波書店
- 中上健次全集 7 日輪の翼、讃歌 中上健次著 集英社
- ヨーロッパ統合の政治史 人物を通して見たあゆみ 金丸輝男編 有斐閣
- 現代ヨーロッパ経済史 原輝史、工藤章編 有斐閣
- ヨーロッパ=ドイツへの道 統一ドイツの現状と課題 坂井栄八朗、保坂一夫編 東京大学出版会
- アメリカ式勉強法 ロン・フライ著 金利光訳 東京図書
- 売り手も買い手も儲かる新車販売 岩原弘史著 近代文芸社
- 消える本屋 出版流通に何が起きているか 山田淳夫著 アルメディア
- 新約聖書に学ぶ 聖句講解90 飯坂良明著 京都 世界思想社
- (新)統計入門 小寺平治著 裳華房
- 新・文化比較の会話 森川キャサリン著 研究社出版
- 日露関係の40年 一日ソ国交回復から「東京宣言」まで「日露関係の40年」編集委員会編 日本・ロシア協会
- アイヌの世界 ヤイユーカラの森から 計良光範著 明石書店
- アイヌを生きる文化を継ぐ 母キナフチと娘京子の物語 小坂洋右著 木村書店
- アイヌ群像 民族の誇りに生きる 飯部紀昭著 御茶の水書房
- 世界史の中から考える 高坂正堯著 新潮社
- 木工の世界 早川謙之輔著 新潮社

カの場合 思想史と文化批判のあいだ マーティン・ジェイ [著] 今井道夫他訳 法政大学出版局  
 時間について ノルベルト・エリアス [著] ミヒャエル・シュレーター編 井本响二、青木誠之訳 法政大学出版局  
 ドイツ人論 文明化と暴力 ノルベルト・エリアス著 ミヒャエル・シュレーター編 青木隆嘉訳 法政大学出版局  
 沈みゆく大国 ロシアと日本の世紀末から 袴田茂樹著 新潮社  
 世界史の想像力 文明の歴史人類学をめざして 湯浅赳男著 新評論  
 脳から心へ 高次機能の解明に挑む 宮下保司、下条信輔編 岩波書店  
 アメリカ・インディアン死闘の歴史 スーザン・小山著 三一書房  
 終焉からの問い 現代短歌考現学 小笠原賢二著 ながらみ書房  
 現代英語文法 大学編 S. グリーンバウム、R. クワーク [著] 池上嘉彦 [ほか] 訳新版 紀伊国屋書店  
 アメリカがわかるアメリカ文化の構図 天野雅文 [ほか] 編 松柏社  
 ヨーロッパを見る視角 阿部謹也著 岩波書店  
 インディアン・カントリー心の紀行 スーザン・小山著 三一書房  
 国際政治の21世紀像 世界をゆるがすドラマ20幕 横山宏章、野林健編 有信堂高文社  
 感性が光る文章の書き方 いい生き方といい文章 高橋玄洋著 同文書院  
 これからの社会的規制 安全・環境・健康に関する規制の適正化・効率化・国際調和、確実な事後救済に向けて 社会的規制研究会編 通商産業調査会  
 地方分権ひとつの形 スイス：発言し、行動する直接民主制 国枝昌樹著 大蔵省印刷局  
 「昭和」を振り回した男たち 半藤一利編 東洋経済新報社  
 銀行革命 財部誠一著 講談社  
 保健・医療の仕事がわかる本 国民医療研究所編本の泉社

## ジョンバチェラー博士

バチェラー師を出した時代背景については、幾多の論文がヴィクトリア朝の英国の生活倫理を形而上学的に又実践論的に考察、考証している。John Stuart Mill (1806-73) の "On Liberty" (自由論)-1859-, Samuel Smiles (1812-1904) の "Self Help" (自助論)-1859-等の思潮を浴び国勢に乗じて海外へ出ていった様々な階級のヴィクトリア人達——バチェラー師の場合も例外ではない。又、キリスト教的使命感を最後まで持続した。

しかし、その持久力の源は何なのであろうか。どんな土地柄が師を生んだのであろうか。

自叙伝 STEPS BY THE WAY (二多見巖氏訳 "わが人生の軌跡") によれば、生地サセックス州アックフィールドの町は静かで農地に囲まれた出来事の少ない、若者にとっては退屈な所との印象を与える。教会屋根裏のふくろうの卵を盗んだことで教会立ち入り禁止のお仕置きを受け情気でしまうなど、いかにも閑かな田園生活を思わせる。

だが、このサセックス州は、南岸にはヘースティングスを始めイーストボーン、ブライトンと対岸に大国フランスを見遙かして要がいの鎧の紐を締めた港町を擁する。ヘースティングスは、周知のウィリアム征服王の上陸地で、ノルマン人が英サクソン王エドワード懺悔王の後嗣と約されたウィリアムを戴いてそれを果たせと攻めあがり、それを迎え撃った英王ハロルドだったが王自身の死で敢えなく降る。激しい戦闘のあったバトル地域に骨を埋めていった兵士の中にはサセックスの男達が多かったに違いない。

1066年のクリスマスにはウィリアムはウエストミンスター寺院で戴冠しているが、ロンドンへの途上アクフィールド辺りもノルマン軍に踏み散らされたのではなかろうか。16世紀のスペイン無



## の郷里を訪ねて (4)

Cornish 菓子

敵艦隊北上時もエリザベス一世は選抜水士達をテムス河経由だけでなく南岸の固めにも送っている。サセックスの男達の活躍は著しかった。このように武骨の気風を誇る面を持つサセックスでヴィクトリア期に入ってからでは The Royal Sussex Regiment が陸軍の中で異彩を放った。中でも植民地印度での活躍が同じレジメントの特色のようである。19世紀後半からアフガンと今のパキスタンの国境の守備に其の粘りと知力を発揮している。話を横道に逸らして申し訳ないが、私が仏教研究で何度か訪れた北パキスタン国境州のペシャワールからアフガニスタンへの道カイパー峠での英軍の墓地には、回教徒のモハメット軍の反乱を制するために送られ、熱暑の中を闘った英兵の霊が眠っている。土地勘のある現地民の蜂起にたち打ちできなかった筈の英軍であるが、1916年から1919年にかけての血みどろの闘いを無敗を誇るイギリスの軍史は決して負けいくさとはしていない。“ローヤルサセックスレジメント”の名は墓碑にも刻まれていた。バチェラー師の死を伝える記事を探すため1915年の春から夏にかけてのSussex County Magazineを幾冊か繰ったが、戦時下のこととて、一際郷土軍人を賛える調子での報告記が目立った。

バチェラー家からは軍人は出ていない。豊かな農地を抱えるサセックスの農民系の仕事に携わる家系である。庭師であり、農夫であり地主の会計士であったりする。今回訪れたバックステッド在住のLesley William Batchelor氏はバチェラー師の弟アルフレッドバチェラー(幾つかの日本での研究には兄としてあるが、この人は1857年生まれで師より2歳若い)のひ孫にあたり大工を本職としている。昨年一線を退き、今は趣味の小禽飼育に打ち込んでいる。60歳一寸前の人だが、こ

れも家系の特徴なのであろう豊かな白髪が品の良い温顔に似合った人である。1944年秋カナダ経由で日本から戻ってきた大老がアクフィールド区教会で講演をした時、小学校にあがったばかりのレスリー少年は母親から制されて“あの方は立派な御仁だけど、親しくなってはいけない。”と言われたそうである。バチェラー師がフロレンスに結婚を申し込んだということに対する親戚の間での戸惑いから来る、無言の抵抗だったようだ。姪といっても血続きではなく、亡妻の方の姪である。そして、双方共に大変な老人なのだ。何と旧弊な英国社会なのだろう。バチェラー師の墓碑もぼつんと一つ立っている。師が亡くなった折フロレンスの、“伯母ルイザの墓碑をバチェラー師の隣に移したい”という申し入れもはっきりした結論が出されぬまま立ち消えになったそうだ。堅苦しいキリスト教モラルのその頃の社会的掟なのか。

Setsuko Cornish march 2nd 1997  
(セツコ コーニッシ ロンドン大学)

# 北海中学の青春群像

## ～北中・札商著名卒業生 14 人にみる北中精神の研究～

(図書展示会 No.27)

期間：平成 9 年 8 月 19 日～11 月 29 日

場所：図書館 1F 自由閲覧室

- 南部忠平氏 (1904 (明治 37)～1997 (平成 9))：なんぶ ちゅうへい・三段跳選手) 関係資料  
(略歴)北中第 19 期：大正 13 年卒。北中陸上競技部の時代からその非凡な才能を発揮し全国大会でも優勝し 8 つのタイトルをとった。札幌鉄道局に入社後、早大に進学し卒業(昭和 4 年)、満州鉄道入社、半年後、美津濃に勤務。～昭和 7 年のロサンゼルス・オリンピック。南部は三段跳で 15 m 72 の世界新記録を出して優勝した。～以下、略
- 若松 勉氏 (1947 (昭和 22)～)：わかまつ つとむ・野球評論家) 関係資料  
(略歴)北海高校第 18 期：昭和 41 年卒、昭和 22 年：留萌市生、昭和 38 年北海高校入学、野球部入部。昭和 40 年夏：高校 3 年生 第 47 回全国高校野球選手権大会(甲子園球場)出場、4 度の盗塁を決めるなど活躍するが～現ヤクルト一軍打撃コーチ
- 本郷 新氏 (1905 (明治 38)～1980 (昭和 55)) 関係資料  
(略歴)南部忠平氏と同期(北中第 19 期：大正 13 年卒)の彫刻家。東京高等工芸学校(現千葉大学)彫刻部卒。昭和 3 年国画会第 1 回展に「女の首」初入選。高村光太郎に師事。戦後は、平和運動にも参加した。
- 早坂文雄氏 (1914 (大正 3)～1955 (昭和 30))：はやさか ふみお・作曲家) 関係資料  
(略歴)北中第 27 期：昭和 7 年卒。伊福部昭、三浦淳らと「新音楽連盟」を結成。昭和 9 年第 1 回国際現代音楽祭を札幌で開催。昭和 10 年管弦楽曲「古代の舞曲」でワインガルトナー賞。黒沢明監督映画「羅生門」で昭和 26 年ベニス国際映画コンクール大賞、アメリカ映画アカデミー賞を受賞。「七人の侍」「山椒太夫」「近松物語」、「生きる」、「野良犬」、「雨月物語」等の映画音楽の作曲。百本近くの作品がある。
- 坊屋三郎氏 (1910 (明治 43)～)：ぼうや さぶろう・俳優・ホードピリアン) 関係資料  
(略歴)北中第 24 期：昭和 4 年卒、本名 柴田敏英、昭和 11 年花月劇場の吉本ショーでホードピリアンとして出演。新宿の「ムーランジュ」のレギュラーとなり、その後、益田喜頓氏らと「あきれたぼういず」を結成し、ボーイズブームを生み出し、一世を風びした。
- 子母沢寛氏 (1892 (明治 25)～1968 (昭和 43))：しもざわ かん・作家) 関係資料  
(略歴)北中第 6 期：明治 44 年卒。厚田村生まれ。本名 梅谷松太郎。厚田小学校を出て庁立函館商業学校に進んだが、間もなく私立小樽商業学校に転じ、さらに北海中学校に移った。在学中に文学活動を開始し、卒業した明治 44 年に上京して明治大学に入学。大正 3 年に卒業して地方紙の編集に携わったあと札幌に戻り、新聞記者や木材関係の仕事に従事した。7 年に読売新聞社に入り、15 年に東京日日新聞社に移る。昭和 3 年処女出版の「新選組始末記」(万里閣)は新選組ものの必読書となった。「笹川の繁蔵」「国定忠治」「弥太郎笠」などによって股旅ものの大衆作家としての地位を不動にした。これら幕末・維新ものによって 37 年に菊地寛賞を受賞した。～
- 島本健作氏 (1903 (明治 36)～1945 (昭和 20))：しまき けんさく・作家) 関係資料  
(略歴)北中第 18 期：大正 12 年卒、本名 朝倉菊雄。札幌西創成小学校から札幌師範付属小学校に転じ大正 6 年高等小学校 1 年で中退、北海道拓殖銀行給仕をしながら夜学へ通った。昭和 8 年、苦学の目的で上京したが、翌年過労と栄養失調で肺炎にかかり帰郷。新聞「万朝報」懸賞短編に「章三の叔父」が当選。昭和 10 年、北海中学校 4 年に編入、文芸部を興し「北中文芸」を創刊、翻訳・評論・小説を発表。～「生活の探求」が大ベストセラーとなった。～
- 寒川光太郎氏 (1908 (明治 41)～1977 (昭和 52))：さむかわ こうたろう・作家) 関係資料  
(略歴)北中第 23 期：昭和 3 年卒、本名 菅原恵光。留萌支庁羽幌町生まれ。小学校教員の父の転任で 8 歳のとき樺太大泊に移住。北海中学校を経て法政大学中退。北海中学時代に同人誌「街道」を創刊して創作を始め、大学では同人誌「審美派」に参加した。「密猟者」(昭和 14)：「創作」創刊号)により第 10 回芥川賞を受賞した(北海道出身作家の第 1 号受賞者)。大自然と

- 人間の対決をテーマとした作品に本領を発揮し、「未婚手帳」～
- 和田芳恵氏 (1906 (明治 39)～1977 (昭和 52))：わだ よしえ・作家、近代文学研究家) 関係資料  
(略歴)北中第 21 期：昭和元年卒。長万部町生まれ。国縫尋常小学校、函館商船学校、北海中学校を経て中央大学独法科卒業。14 歳の時に生家が破産して苦学し、母校の代用教員を勤めたりした。昭和 6 年新潮社に入社。藤村作監修「日本文学大辞典」、大衆雑誌「日の出」の編集に従いつつ小説を書き、「格闘」が昭和 16 年上半年期の芥川賞候補作となった。この年新潮社をやめて著作生活に入り、「樋口一葉の日記」(昭和 52 年：第 13 回日本芸術院賞受賞)、作品集「作家達」「離愁記」などを戦時下に刊行した。戦後の作家活動は「塵の中」(昭和 39 年)の第 50 回直木賞受賞以後、「みだれ髪」「色合はせ」「火の車」などの短編集、読売新聞文学賞「接木の台」(昭和 50 年)、日本文学大賞「暗い流れ」(昭和 52 年)、没後の川端康成文学賞「雪女」(昭和 52 年)などがある。～
- 吉田一穂氏 (1898 (明治 31)～1973 (昭和 48))：よしだ いっすい・詩人、詩学者、文壇批評家) 関係資料  
(略歴)北中第 13 期：大正 7 年卒、本名は由雄(よしお)。渡島支庁木古内町字釜谷村生まれ。生家は網元で積丹半島の鯨漁場、後志支庁古平町で少年時代を送った。北海中学校を卒業後、大正 7 年坪内逍遙を慕って早稲田大学高等科に入学。横光利一、佐藤一英らと交遊。大正 9 年生家の没落で大学を中退、童謡、童話などの売文生活を送った。大正 13 年に童話集「海の人形」、昭和元年に詩集「海の聖母」、昭和 16 年に詩論集「黒潮回帰」を刊行。精神の風土としての北海道の独立を主張。北方の詩精神の典型として偉大な感化を残した。日本のマラルメと称され、昭和詩史の北極星として不朽の名声を持っている。～
- 野呂栄太郎氏 (1900 (明治 33)～1934 (昭和 9))：のろ えいたろう・マルクス主義経済学理論家)  
(略歴)北中第 15 期：大正 9 年卒。昭和初期の屈指のマルクス主義経済学理論家。夕張郡長沼村に生まれる。開拓農民野呂市太郎の長男。小学 2 年の時のけががもとで右足膝下切断の手術を受けた。この身体障害を理由として北海道庁立札幌第一中学校の受験に不合格と判定され、北海中学に入学。開校以来の秀才の誉れ高く、大正 9 年の卒業時には北海タイムス(現北海道新聞)に「北海道の英才、義足の野呂栄太郎君卒業す」の記事が出た。同年慶応義塾大学予科入学、昭和元年卒業、この時の卒論が「日本資本主義発達史」であり、ほぼこれと同じものが昭和 2 年「社会問題講座」に発表されたが、これはマルクス主義に立った日本経済発達史の通史としては最初のものであってよく、日本資本主義研究の分野で衆目の認める古典としての地位を獲得している。～
- 沢田誠一氏 (1920 (大正 9)～)：さわだ せいいち・作家) 関係資料  
(略歴)札商第 16 期：昭和 13 年卒。札幌市平岸生まれ。父はリソグラフ自営。昭和 8 年札幌商業学校に入学し、教師の影響で文学書の濫読がはじまる。昭和 13 年卒業のころから作歌をはじめめる。16 年陸軍高射砲学校に入学し、以後、小樽、北千島などを転じ、終戦を埼玉県の高射砲隊(中隊長)で迎える。22 年西尾広子と結婚。23 年ごろから小説の試作をはじめ、翌年ようやく上京の念を固めたとき父が急逝しリンゴ園を継ぐ。26 年西村真吉のすすめで西田喜代司の「札幌文学」9 号に「蠅のたかった歴史」を発表。27 年休刊中の「札幌文学」の編集責任者となる。27 年 12 月「新潮」に「准将」が全国同人雑誌推薦小説として掲載される。43 年 1 月浪花剛の肝入りで小笠原克と「北方文芸」を創刊し、55 年 1 月の 144 号から編集発行人として「北方文芸」を支えてきた(現在、休刊中)。長編小説「斧と楡とのひつぎ」(青娥書房 昭和 48 年)は 43 年北海道新聞文学賞を受賞し、直木賞の候補にもなった。～他、卒業生 14 人の著書 92 冊を展示中。

※資料配布中 (6 p.)

# 留学生リレーエッセイ

郑 萌萌

(中国 瀋陽市出身)

## 博物館での自己発見

先日東京へ出かけた時、上野の国立博物館に行ってきました。見終わった今はまさに多くの人々にお勧めしたい気持ちでいっぱいです。東京を訪ねる機会があったら、上野の博物館は見逃せない名所だと思います。日本人だけではなく外国人でも、特にアジアの人々は、自分が無意識に背負っている自国文化を再認識できると思うからです。

私が訪ねた時、ちょうどインドネシアの国宝展が開かれていました。この国宝展は黄金工芸品と仏教彫刻とで構成されていました。豪華な黄金の美術品は人の目を奪います。また一点一点の作品にインドネシアの人々の独自の美意識、伝統工芸技術の水準の高さを感じました。

一方、展示している仏教彫刻はその数の膨大さ、造型の豊かさ、一つ一つの仏像に漂っている民族的個性が印象的でした。そして、博物館側の工夫だと思いますが、インド、中国、韓国、日本のほぼ同時代の仏教彫刻も同時に展示されていました。私はこのことに全く気がつかないまま、一つの石彫観音像の前で足を止めました。そのほほえみはやさしく暖かく、見ているうちに気持ちが和んできました。心を惹かれて下の説明カードを見ると、それは中国雲岡石窟の仏像でした。それから、気をつけて見ていたら、自分が親しみを感じる仏像はほとんど中国のものでした。日本の仏像は静かな感じがしますが、同展の中国の仏像ははっきりとした表情でほほえんでいたり、体も大きな動きをみせたりしていて、とても生き生きとしていました。

展示品は各国のほぼ同時代の仏教彫刻であり、同じ仏教信仰から生まれた彫刻作品ですが、各国でその国の人々の独自の感性、解釈によって、徐々

に変わってきたことがよく分かります。仏像の表情と姿勢、顔のつくり、その精神面の表し方などが、まさに各国でそれぞれの展開を見せたのでしょう。中国に伝来した仏教もきっと中国人なり理想によって変わったのだと思います。そしてこの変化によって中国人が一番親しみやすい仏像が生まれたのでしょうか。ほかの国の人々もきっと私と同じく自分の国の仏像に共感を持つのではないのでしょうか。雲岡石窟の観音像を見てそのほほえみに惹かれた私は、自分が中国人であると深く感じました。私たちが祖先から引きついできたのは中国人という呼び名だけではないのです。物事に対する感受性、理解、とらえ方などすべてを無意識のうちにみごとに引きついでいるのだと実感しました。

もう一つ、上野の博物館で私は初めて中国の実物の甲骨文を見ました。一つひとつの骨のかけらに、紀元前千年前に中国の大地で広がっていた戦いの様子や、催された祭祀の内容などがはっきりと刻まれています。そうした歴史が私たち子孫にちゃんと伝えられるということは本当に驚きです。漢文の説明と対照させながらそれらの文字を読んでいるうちに、私の目に涙がにじんできました。自分の祖先の作った文明に心を強く打たれたのです。

上野の博物館での感動は私の宝物です。中国人ならきっと私と同じような気持ちで自分の民族に対する誇りで胸いっぱいになるでしょう。そしてこれからどんな辛い時でも、誇りを持って胸をはって生きていけると思いました。

(テイ・メイメイ 人文学部日本文化学科3年)

# 傳(てん)と傳(ふ)のことなど

～その三～

石村 義典

「膨大」という表現を使っていい、河野常吉ののこした「河野常吉資料」のなかに追跡しえた、明治四十二年「韓国皇太子李垠行啓」に関する資料は僅かに短文二点でしかなかったことはさきにふれている。やっと行き着いた、その二点の短文は小樽市史年表、室蘭市史年表のための草稿で、前者は「明治四十二年八月 韓国太子李垠・太傅伊藤博文」、後者は「韓国皇太子殿下御見学ノ為メ太師伊藤博文(枢密院議長侯爵)以下随員ト共ニ札幌ヨリ室蘭ニ着シ、炭礦会社事務所ヲ旅館トセラル。十一日新冠ニ赴キ、十五日室蘭ニ還啓、十七日出発セラル」となっており、これ以上の記録を見出すことはできない。当時の新聞の表現は北海タイムスでは「韓皇儲行啓」、小樽新聞は「韓国太子巡啓」、東京日日新聞は「韓国皇太子殿下御巡啓」となっていて、すべて「行啓」の認識である。河野北海道史付録年表の「来道」「巡覧」とは次元の差をみる。「行啓」から「来道」「巡覧」への移行に河野常吉はどんな懐いを重ねたであろうか。河野常吉の日記のなかからすら明治四十二年「韓国皇太子李垠行啓」は抹消されている。河野常吉の明治四十二年日記は不自然にも九月二十日から始まる。韓国皇太子李垠行啓の事務処理が一段落したとうけとる時点からである。こうした「韓国皇太子李垠行啓」関係資料の欠落と対照的に、翌々年明治四十四年の「東宮殿下行啓」資料は豊かにのこされている。「鶴駕奉迎録」(一〇三丁)、「明治四十四年夏御行啓関係書類」(八十二丁)、「皇太子行啓」(二十八丁 新聞切抜)、「皇太子行啓について」(二十六丁)、「鶴駕陪従談(一)」(十二丁、新聞切抜朱入れ、河野常吉の北大農科大学に於ける講演記録)、それに野帳三冊をも「河野常吉資料」

に見出す。この二つの行啓関係資料の対照的な残存状況を、一層鮮明にみるのは北大北方資料室においてである。あふれるばかりの資料、写真をみいだす明治四十四年東宮殿下行啓、それに比し韓国皇太子李垠行啓には一枚の写真、一片の資料をも見い出さず、さきにふれたようにこの月の諸新聞を欠く。これと同じように、二つの行啓にたいする対照的な資料の残存を示すのは北海道庁においてである。一方、情報の中枢からはずれた場所から「韓国皇太子李垠行啓」に関する資料を見出すことがある。札幌市史編纂室に現存する、札幌区「韓国太子行啓書類 明治四十二年」(三一二丁)、そして市立小樽図書館所蔵の渡辺兵四郎旧蔵「明治四十二年 韓国皇太子殿下書類」(三十七丁)である。両者ともに北海道庁から発した韓国皇太子李垠行啓歓迎についてのきめ細かい通達が含まれている。

韓国皇太子李垠行啓の随員として来道した伊藤博文がのこした揮毫「一以貫之」は現在北大北方資料室にあり、心をとめるものにその意味を問いかけている。

(いしむら よしのり 北駕文庫担当)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.19 No.3 (通巻143号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目  
☎(011) 841-1161 本館内線 270-275・279 工学部内線 813・814 印刷所: ㈱アイワード